

平成20年(ワ)第1978号, 第2900号, 第4164号, 第5102号 ウイルス性肝炎患者の救済を求める全国B型肝炎訴訟・九州訴訟損害賠償請求事件

原告 原告番号1番ないし91番

被告 国

意見陳述書

平成21年7月1日

福岡地方裁判所 民事第2部 御中

原告 原告番号13番

1 はじめに

原告番号13番です。44歳になりました。

福岡市で両親と暮らしています。

2 感染が分かるまで

私は、人と話をするのが苦手な子どもでした。

いつも教室の隅で、黙って座っていました。

4年生から、特別な支援をしてくれるクラスに入りました。友達は、4、5人だけでした。

社会人として自立できるだろうか。両親は、随分、心配していたようです。

高校卒業後、小さな町工場に就職しました。

運動会で使うテントや、大型のシートを作る工場でした。

布地をつなぎ合わせる仕事をもらいました。はじめて、プレス機やミシンを使いました。

はじめは、やり方がわかりませんでした。先輩たちによく怒られました。それでも、黙って仕事を覚えました。一人前になるまでに、3年かかりました。

一緒に入ったみんなは、仕事がきつくてやめました。でも、私は、やめませんでした。工場の仕事が好きだったからです。みんなが頑張って、だんだんテントの形になっていきます。その仕事が、とても素晴らしいと思ったからです。

社長さんも奥さんも、私のことを大切にしてくれました。みんなを笑わせてくれる職人さんもいました。

毎朝、工場に行くのが楽しみでした。

15万円くらいの給料をいただきました。家に、いくらか入れました。少しですが蓄えもできました。両親が、一人前に見てくれている、と感じました。

平成元年には、福岡で、よかとぴあという、万博がありました。広い会場のあちこちに、私たちが作ったテントが張られました。私は、自分の作ったそのテントを観に行きました。誇らしい気持ちになりました。僕が作ったんだよ。そう、みんなに教えてあげたい気持ちでした。

3 はじめてのインターフェロン治療のこと

ちょうど、そのすぐあとでした。B型肝炎という病気にかかっていることを知りました。26歳でした。

私は、B型肝炎という言葉を知りませんでした。医師から、「ほっておくことができない大変な病気だ」と説明されました。治るためには、インターフェロンをきなさい、と言われました。

死にたくない、と思いました。

治療したい、と思いました。

インターフェロンを打つと、高い熱がでました。頭痛がしました。食べたものを全部もどしました。

けれど、ウイルスは消えませんでした。

4 工場を辞めざるを得なくなったこと

年々、体がきつくなっていきました。

それでも、仕事は休みませんでした。工場で働くことが、生き甲斐だったからです。

そのために、ますます、体がきつくなりました。

元気になりたい。だから、毎年、インターフェロンを受けました。

35歳の時でした。朝、起き上がることができなくなりました。テントの布地も持てなくなりました。通勤できたのは、1年間に100日でした。

とうとう、社長さんから「かわいそうだけど、やめてもらえないか。」と言われました。

社長さんは、わが子のように、私を大切にしてくれました。その社長さんから、やめるように言われました。逆らうことはできませんでした。

18年間お世話になった工場を辞めました。

工場は、私の生活の全てでした。自信と、安定を、初めてもらったところでした。息がつまるような、苦しい思いがしました。

5 ウイルスが排除できなかったこと

肝臓の値は2000を超えるようになりました。

病気を治したい。元気になりたい。働きたい。そう思いました。

7回目のインターフェロンに挑戦しました。インターフェロンをはじめて、9年がたっていました。

熱が出て、激しい頭痛がありました。きつくて、きつくて、起き上がることもできませんでした。

それでも、B型肝炎ウイルスは消えませんでした。

工場で貯めた数百万円の貯金が、なくなってしまいました。

6 抗ウイルス薬にしばられる生活

このすぐあとのことです。医師から、「年齢的に、インターフェロンはできない」と言われました。

もう元気になれない。肝臓がんになって、そして、死ぬかもしれない。絶望的な気持ちになりました。

抗ウイルス薬を飲み始めました。でも、薬代などで、一カ月に1万円ほどかかります。親の年金から出してもらうしかありません。40歳を過ぎました。年老いた親の年金に頼る自分が、情けないです。

薬代くらいは自分で稼ぎたい。そう思って、新聞配達のアルバイトをしました。去年は、プールの掃除の仕事をしました。

どちらも、続けられませんでした。すぐ、体がきつくなるのです。

起き上がれない日は、部屋でただただ横になっています。

眠れずに、じっと、天井を眺めています。

親に心配をかけてしまった。自分を責めています。

私は、B型肝炎になったことが悔しいです。

7 最後に

この前、東京に行きました。国会議員の先生方に会うためです。

病気のつらさを話しました。

議員さんに、じっと聞いてもらいました。一緒に、写真をとってくれた方もいます。

議員さんが、私たちのことを分かってくれる。応援してくれている。そのことを、はじめて知りました。

だから、私もやれることをやる。そう思って、今日ここに立ちました。

裁判長に、お願いします。

毎朝、工場に通う。それだけの毎日を、なくしました。両親も、年をとりました。私の将来を心配しています。このことをしっかり見てください。

そして、私の元気な体を返してください。

そのために、本当のことを、認めてください。

私たちが、注射のまわし打ちの犠牲者だと、言って下さい。

よろしくお願いします。

以上